

【肉用牛】

飼育戸数は前年とほぼ同じの573戸。頭数は6%増の22万7,332頭となった。うち黒毛和種は14.6%増の5万4,774頭。

12カ月齢未満の素（もと）牛が15.9%増の2万143頭、12カ月齢以上の肥育牛は39.9%増の1万3,179頭など。

ホルスタイン種（肉用）は5.3%減の8万5,911頭。乳用交雑種を含むその他の肉用牛は15.3%増の8万5,844

頭だった。

【豚・馬】

豚の飼育戸数は前年とほぼ同じ27戸。飼育頭数は繁殖豚、肥育子豚を合わせて1.1%増の6万3,288頭。

馬の飼育戸数は7%減の143戸。頭数は6%増の1,467頭。軌系（ばんけい）馬が840頭で3.1%増加した。

さけるチーズ増産へ 大樹工場、生産ライン増設 雪印メグミルク 来月着工、23年春稼働

2021年5月19日

雪印メグミルク（東京、西尾啓治社長）は、ナチュラルチーズの基幹工場となっている大樹工場（大樹町緑町35、和泉洋工場長）で、「さけるチーズ」の生産ラインを増設する。投資額は70億円。6月に着工し、2023年4月の稼働を予定している。

13日の21年3月期決算説明会で公表した。

コロナ禍による巣ごもり需要を受け、家庭用ナチュラルチーズの売り上げは好調に推移。さけるチーズは同社の主力商品で、大樹工場は3種類を生産、最も需要があるプレーン味は同工場が製造を担っている。13年にも増産目的で新棟を建設（68億円を投入）しており、さらなる生産体制の強化を図る。

同社は「中長期的に生産体制を強化する」としている。さけるチーズの26年度の売上高は17年度比4割増を見込んでいる。

大樹工場では2020年6月、カマンベールチーズの増産を目的に、約70億円を投入して新棟の建築工事に着手。同棟は2022年7月に稼働する予定。現在の従業員数は

345人（派遣社員含む）で、大樹、広尾両町から原料になる生乳を受け入れている。



さけるチーズの生産ラインを増設する
雪印メグミルク大樹工場

生乳12年ぶり生産抑制 前年度比1%増に 酪対

2021年10月11日

道農協酪農畜産対策本部委員会（酪対）は8日、2022年度の生乳生産目標を前年度目標（411万8,031トン）に対し、1%増に抑える方針を固めた。毎年の生産目標は3%増を基本としているが、コロナ禍で脱脂粉乳などの在庫が積み上がる状況を踏まえ、生産抑制を行う。生産目標が基準の3%増を大きく割り込むのは12年ぶり。ただ、全道規模での減産は回避し、コロナ後の需要回復に迅速に対応できる体制を維持する。

現在、酪対では来年度から始まる「次期計画生産」の内容を協議している。3年程度の期間を見越しているが、足元では業務用の需要減に巣ごもり需要の伸び悩みが加わり、厳しい環境が続いている。

このため、まず22年度の目標を1%増に設定。農協全体では前年並みとし、1%分を新規就農者や規模拡大に取り組んできた事業者配分する方向で協議している。

過去には冷夏の影響などで06年から08年にかけて減産を実施したことがある。この際には全道の生産能力が縮小して、その後の需要回復への対応が遅くなった経験が

ある。今回は、新規就農者や生産基盤を強化してきた事業者への配慮をしつつ生産抑制を行うことで、競争力を維持する構え。

十勝では個々の努力で規模拡大や生産技術の向上が進み、生乳生産は前年比4.2%増（9月末）で推移。全道シェアは3割を超えている。十勝酪農畜産対策協議会の坂井正喜会長（JA大樹町組合長）は「価格を維持するための厳しい判断。生産者には丁寧に説明し、一定期間の辛抱をお願いしたい」と話している。